

## きょうだい関係と意識

### —— 性差観の検討 ——

白 佐 俊 憲\*

#### I は じ め に

この報告は、「きょうだい関係と意識」というテーマで、青年後期の女子（短期大学1年目学生、2,085人）を対象に「きょうだい関係（出生位置・出生順位など）によって意識（意見・態度）面での差異が認められるかどうか」を質問紙形式で調査し、多面的に実証的な検討を試みた研究の第3報である。同時に調査した「子供観に関する14項目」の結果は既に第1報<sup>1)</sup>・第2報<sup>2)</sup>で報告したので、ここでは、次にあげる「性差観に関する8項目」の結果を報告する。

- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| ① 女に生まれたことの感想   | ⑤ 男女の能力差の認識        |
| ② 生まれ変わるときの希望の性 | ⑥ 家庭等での差別的扱いの経験    |
| ③ 男に生まれ変わりたい理由  | ⑦ 結婚後の親との同居についての考え |
| ④ また女に生まれたい理由   | ⑧ 親と同居する場合の希望      |

なお、本研究の意義・目的等については、できるだけ説明の重複を避け、データの掲載に誌面を多く割く意味で、第1報の「I はじめに」を参照願うことにして、ここでは省略する。

#### II 方 法

本研究の方法については、第1報の「II 方法」で述べたので、ここでは省略する。

#### III 結果及び考察

ここでは、第2報の「III 結果及び考察」に続く形で見出し項目を設定し、続きを述べる。

なお、誌面制限の関係で、具体的な集計データは「出生位置による分類」の結果を主にして、他については、有意差のある結果が得られた場合にだけ示すことにする。それ以外は集計データを省略し、結論だけを述べるにとどめることを、あらかじめ断っておく。

##### 17. 女に生まれたことの感想

女に生まれたことの感想については、次のように設問し、以下に示すような回答を得た。

---

\*北海道女子大学人間福祉学部

キーワード：きょうだい関係，意識，性差観

【質問15】あなたは女に生まれてよかったと思いますか。それとも、男に生まれた方がよかったと思いますか。次の中から一つ選んで下さい。

- a. 女に生まれてよかった。                      c. どちらともいえない。  
b. 男に生まれた方がよかった。                  d. わからない。

(1) 出生位置別検討

表49は、全対象者（2,085人）の結果を出生位置別（長子896人・中間子233人・末っ子790人・一人っ子166人）に分けて整理したものである。表49に示すように、対象者全体の場合、「a. 女に生まれてよかった」という者が半数以上の58.6%を占め、「b. 男に生まれた方がよかった」という者の12.9%よりも圧倒的に多く、女に生まれたことを好意的にとらえている。「c. どちらともいえない」という者も25.3%いる。全対象者の出生位置別比較では、中間子で、cがやや多く、aがやや少ない。検定（ $\chi^2$ 検定、以下すべて同じ）の結果は、中間子と長子・一人っ子との間で統計的に有意な差が認められる。ただし、調査の実施年によって分け、結果の一貫性（安定性）を確認したところ、1994年（1,157人）の結果では長子と中間子との間で有意差が認められるが、1993年（928人）の結果では有意差は認められない。

出生位置別の差異をより厳密な条件で検討するため、二人っ子については長子(667人)と末っ子(572人)に分け、また、三人っ子については長子(210人)・中間子(191人)・末っ子(193人)

表49 女に生まれたことの感想（出生位置別，全対象者）

単位：人（%）

判断	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子	備 考
a	1,221(58.6)	545(60.8)	119(51.1)	460(58.2)	97(58.4)	中間子と長子・一人っ子との間で各5%水準で有意差あり。
b	268(12.9)	111(12.4)	29(12.4)	99(12.5)	29(17.5)	
c	527(25.3)	215(24.0)	78(33.5)	199(25.2)	35(21.1)	
d	69( 3.3)	25( 2.8)	7( 3.0)	32( 4.1)	5( 3.0)	
合計	2,085(100.1)	896(100.0)	233(100.0)	790(100.0)	166(100.0)	

表50 女に生まれたことの感想（出生位置別，二人っ子・三人っ子）

単位：人（%）

判断	二 人 っ 子		三 人 っ 子			備 考
	長 子	末 っ 子	長 子	中 間 子	末 っ 子	
a	399(59.8)	327(57.2)	135(64.3)	97(50.8)	119(61.7)	三人っ子の長子と中間子との間で1%水準で有意差あり。
b	76(11.4)	69(12.1)	31(14.8)	24(12.6)	26(13.5)	
c	171(25.6)	149(26.0)	40(19.0)	65(34.0)	44(22.8)	
d	21( 3.1)	27( 4.7)	4( 1.9)	5( 2.6)	4( 2.1)	
合計	667(99.9)	572(100.0)	210(100.0)	191(100.0)	193(100.1)	

に分けて、表49と同様な方法で集計し比較してみた（表50）。表49と同様な結果が得られ、検定の結果、三人っ子の長子と中間子との間に有意な差が認められる。ただし、結果の一貫性を確認したところ、1994年の結果では有意差が認められるが、1993年の結果では有意差は認められない。

#### (2) きょうだい数別検討

きょうだい数別検討では、一人っ子（166人）・二人っ子（1,239人）・三人っ子（594人）・四人以上（86人）について、表49と同様な方法で集計し比較した。その結果、きょうだい数の増加に伴う一定の増減傾向が認められるものではなく、検定の結果、どの群間でも統計的に有意な差は認められない。

#### (3) 出生順位別検討

出生順位別検討では、第1子（1,062人）・第2子（778人）・第3子以降（245人）について、表49と同様な方法で集計し比較した（表51）。その結果、第1子と第2子との間で統計的に有意な差が認められるが、全体のデータとして出生順位に伴う一定の傾向は認められない。また、結果の一貫性の検討では、第1子と第2子との間の統計的な有意差は両年ともに認められない。

表51 女に生まれたことの感想（出生順位別、全対象者）

単位：人（％）

判断	全 体	第 1 子	第 2 子	第 3 子以降	備 考
a	1,221(58.6)	642(60.5)	434(55.8)	145(59.2)	検定の結果、第1子と第2子との間で5%水準で有意差あり。
b	268(12.9)	140(13.2)	93(12.0)	35(14.3)	
c	527(25.3)	250(23.5)	218(28.0)	59(24.1)	
d	69( 3.3)	30( 2.8)	33( 4.2)	6( 2.4)	
合計	2,085(100.1)	1,062(100.0)	778(100.0)	245(100.0)	

#### (4) 性別構成別検討

性別構成の違いによる検討では、第1報の「Ⅱ 方法 3」の「(4)性別構成による分類」で示した分類と対象数（二人っ子：男1人650人，女1人589人。三人っ子：男2人124人，男1女1人307人，女2人163人。二人っ子：兄がいる者314人，弟がいる者336人，姉がいる者258人，妹がいる者331人）について、表49と同様な方法で集計し比較した。その結果、一定の傾向も統計的な有意差も認められない。

以上のように、どのきょうだい関係の検討からも、きょうだい関係と「女に生まれたことの感想」との間に何らかの関係があるという結果は得られていない。

### 18. 生まれ変わるときの希望の性

生まれ変わるときの性の希望については、次のように設問し、以下に示すような回答を得た。

【質問16】 もしもう一度生まれ変わることができるとしたら、あなたは男と女のどちらに生まれたいと思いますか。

- a. 男に生まれ変わりたい。      c. どちらでもよい。  
b. また女に生まれたい。      d. わからない。

#### (1) 出生位置別検討

表52に示すように、対象者全体の場合、「b. また女に生まれたい」という者が44.1%で最も多いが、「a. 男に生まれ変わりたい」という者も30.7%いる。「女に生まれたことの感想」と比較すると、生まれ変わる場合には男の希望が強くなる傾向にある。全対象者の出生位置別比較では、中間子で、「c. どちらでもよい」がやや多く、aがやや少ない。検定の結果、中間子と長子・一人っ子との間で統計的に有意な差が認められる。ただし、調査の実施年によって分け、結果の一貫性を確認したところ、1994年の結果では、中間子と長子との間で有意差が認められるが、1993年の結果では、どの群間でも有意差は認められない。

出生位置別の差異をより厳密な条件で検討するため、二人っ子について長子と末っ子に分け、また、三人っ子について長子・中間子・末っ子に分けて、表52と同様な方法で集計し比較してみた。表53に示すような結果が得られ、検定の結果は、三人っ子の中間子と長子・末っ子との間で統計的に有意な差が認められる。ただし、結果の一貫性を確認したところ、1994年の結果

表52 生まれ変わるときの性の希望（出生位置別，全対象者）

単位：人（％）

判断	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子	備 考
a	641(30.7)	268(29.9)	61(26.2)	251(31.8)	61(36.7)	中間子と長子・一人っ子との間で各5%水準で有意差あり。
b	919(44.1)	418(46.7)	96(41.2)	332(42.0)	73(44.0)	
c	399(19.1)	162(18.1)	55(23.6)	158(20.0)	24(14.5)	
d	126( 6.0)	48( 5.4)	21( 9.0)	49( 6.2)	8( 4.8)	
合計	2,085(99.9)	896(100.1)	233(100.0)	790(100.0)	166(100.0)	

表53 生まれ変わるときの性の希望（出生位置別，全対象者）

単位：人（％）

判断	二 人 っ 子		三 人 っ 子			備 考
	長 子	末 っ 子	長 子	中 間 子	末 っ 子	
a	193(28.9)	175(30.6)	67(31.9)	49(25.7)	67(34.7)	三人っ子の中間子と長子・末っ子との間で5%水準で有意差あり。
b	317(47.5)	238(41.6)	94(44.8)	78(40.8)	83(43.0)	
c	118(17.7)	119(20.8)	42(20.0)	43(22.5)	35(18.1)	
d	39( 5.8)	40( 7.0)	7( 3.3)	21(11.0)	8( 4.1)	
合計	667(99.9)	572(100.0)	210(100.0)	191(100.0)	193(99.9)	

では、中間子と長子・末っ子との間で有意差が認められるが、1993年の結果では、どの群間でも有意差は認められない。

(2) きょうだい数別検討・性別構成別検討

きょうだい数別検討・性別構成別検討については、表52と同様な方法で集計し比較したが、それぞれの群間で差はあまりみられず、検定の結果、どの場合の群間でも統計的に有意な差は認められない。

(3) 出生順位別検討

出生順位別検討では、第1子・第2子・第3子以降について、表52と同様な方法で集計し比較した(表54)。検定の結果、第1子と第2子との間及び第2子と第3子との間で統計的に有意な差が認められるが、全体のデータとして出生順位に伴う一定の傾向は認められない。また、結果の一貫性を確認したところ、1994年の結果では、第1子と第2子との間及び第2子と第3子との間で統計的に有意な差が認められるが、1993年の結果では、どの群間でも有意差は認められない。

表54 生まれ変わるときの性の希望(出生順位別, 全対象者)

単位: 人 (%)

判断	全 体	第 1 子	第 2 子	第 3 子以降	備 考
a	641(30.7)	329(31.0)	225(28.9)	87(35.5)	検定の結果、第1子と第2子との間、第2子と第3子との間で、各5%水準で有意差あり。
b	919(44.1)	491(46.2)	324(41.6)	104(42.4)	
c	399(19.1)	186(17.5)	168(21.6)	45(18.4)	
d	126( 6.0)	56( 5.3)	61( 7.8)	9( 3.7)	
合計	2,085(99.9)	1,062(100.0)	778(99.9)	245(100.0)	

以上のように、どのきょうだい関係の検討からも、きょうだい関係と「生まれ変わるときの性の希望」との間に何らかの関係があるという結果は得られていない。

19. 男に生まれ変わりたい理由

男に生まれ変わりたい理由については、次のように設問し、以下に示すような回答を得た。

【質問17】 質問16で「男に生まれ変わりたい」と答えた人にうかがいます。なぜ、男に生まれ変わりたいのですか。次の理由の中から、当てはまるものを選んで記号に○印をつけて下さい。一つとは限りません。そのうち、最も当てはまるものに◎印をつけて下さい。

- a. 男の方が威張ってられるから。
- b. 男の方が能力を伸ばすことができるから。
- c. 男の方が家事や育児の苦勞がないから。

- d. 男の方が自由で好きなことができるから。
- e. 男の方が楽しみが多いから。
- f. なにかにつけて差別され男の方が有利な社会だから。
- g. 男は思う存分に仕事などに専念できるから。
- h. 職業の選択域が広く、責任ある地位につけ、収入も多いから。
- i. 男性的体格・性格にあこがれをもつから。
- j. その他 ( )

### (1) 出生位置別検討

表55に示すように、対象者全体の場合、「d. 男の方が自由で好きなことができるから」という者が29.5%で最も多く、次いで「i. 男性的体格・性格にあこがれをもつから」という者が25.0%, などの順となっている。複数回答を集計した表56の場合でも、主要な理由については同じものがあげられている。全対象者の出生位置別比較では、どの群間でも統計的に有意な差は認められない。

出生位置別の差異をより厳密な条件で検討するため、二人っ子について長子と末っ子に分け、また、三人っ子について長子・中間子・末っ子に分けて、表55と同様な方法で集計し比較してみた。その結果、どの群間でも統計的に有意な差は認められない。

### (2) きょうだい数別検討・出生順位別検討

きょうだい数別検討・出生順位別検討については、表55と同様な方法で集計し比較したが、それぞれの群間で差はあまりみられず、検定の結果、どの場合の群間でも統計的に有意な差は認められない。

表55 男に生まれ変わりたい理由1 (出生位置別, 全対象者)

単位: 人 (%)

理由	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子	備 考
d	189(29.5)	76(28.4)	16(26.2)	82(32.7)	15(24.6)	検定の結果、 どの群間でも 有意差なし。
i	160(25.0)	75(28.0)	14(23.0)	58(23.1)	13(21.3)	
b	63( 9.8)	22( 8.2)	6( 9.8)	30(12.0)	5( 8.2)	
h	50( 7.8)	20( 7.5)	4( 6.6)	20( 8.0)	6( 9.8)	
g	43( 6.7)	19( 7.1)	6( 9.8)	12( 4.8)	6( 9.8)	
f	33( 5.1)	13( 4.9)	3( 4.9)	12( 4.8)	5( 8.2)	
その他	103(16.1)	43(16.0)	12(19.7)	37(14.7)	11(18.0)	
合計	641(100.0)	268(100.1)	61(100.0)	251(100.1)	61(99.9)	

注) 最も当てはまるものの一つの場合。ここでは、頻度順に並べ替えて示し、回答数の少なかったa・c・eはjと合わせて「その他」とした。

表56 男に生まれ変わりたい理由2（出生位置別，全対象者） 単位：人（％）

理由	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子
d	384(59.9)	158(59.0)	36(59.0)	154(61.4)	36(59.0)
i	303(47.3)	130(48.5)	27(44.3)	122(48.6)	24(39.3)
b	204(31.8)	74(27.6)	22(36.1)	87(34.7)	21(34.4)
h	177(27.6)	83(31.0)	12(19.7)	66(26.3)	16(26.2)
e	155(24.2)	52(19.4)	16(26.2)	71(28.3)	16(26.2)
g	143(22.3)	65(24.3)	13(21.3)	49(19.5)	16(26.2)
f	134(20.9)	57(21.3)	15(24.6)	49(19.5)	13(21.3)
c	73(11.4)	27(10.1)	7(11.5)	27(10.8)	12(19.7)
a	18( 2.8)	9( 3.4)	3( 4.9)	6( 2.4)	0( - )
j	74(11.5)	36(13.4)	9(14.8)	24( 9.6)	5( 8.2)
基準数	641	268	61	251	61

注) 当てはまるものすべての場合。ここでは，頻度順に並べ替えて示した。

表57 男に生まれ変わりたい理由1（性別構成別，二人っ子・三人っ子） 単位：人（％）

理由	二 人 っ 子		三 人 っ 子			備 考
	男 1 人	女 1 人	男 2 人	男1女1人	女 2 人	
d	68(32.9)	40(24.8)	12(30.8)	24(26.1)	17(32.7)	検定の結果， 二人っ子の男 1人と女1人 との間で5％ 水準で有意差 あり。
i	47(22.7)	44(27.3)	10(25.6)	24(26.1)	14(26.9)	
b	30(14.5)	9( 5.6)	2( 5.1)	11(12.0)	5( 9.6)	
h	11( 5.3)	18(11.2)	2( 5.1)	6( 6.5)	6(11.5)	
g	14( 6.8)	9( 5.6)	3( 7.7)	9( 9.8)	1( 1.9)	
f	9( 4.3)	12( 7.5)	1( 2.6)	3( 3.3)	1( 1.9)	
その他	28(13.5)	29(18.0)	9(23.1)	15(16.3)	8(15.4)	
合 計	207(100.0)	161(100.0)	39(100.0)	92(100.1)	52(99.9)	

注) 最も当てはまるものの一つの場合。ここでは，頻度順に並べ替えて示し，回答数の少なかったa・c・eはjと合わせて「その他」とした。

### (3) 性別構成別検討

性別構成の違いによる検討では，第1報の「Ⅱ 方法 3」の「(4)性別構成による分類」で示した分類と対象数について，表55と同様な方法で集計し比較した（表57）。検定の結果，二人っ子の男1人と女1人との間に統計的な有意差が認められる。しかし，三人っ子の間では矛盾する傾向になっているし，二人っ子についての結果の一貫性も認められない。

以上のように，どのきょうだい関係の検討からも，きょうだい関係と「男に生まれ変わりたい理由」との間に何らかの関係があるという結果は得られていない。

## 20. また女に生まれる理由

生まれ変わることができたら、また女に生まれる理由については、次のように設問し、以下に示すような回答を得た。

【質問18】質問16で「また女に生まれる」と答えた人にうかがいます。なぜ、また女に生まれるのですか。次の理由の中から、当てはまるものを選んで記号に○印をつけて下さい。いくつ選んでもかまいません。そのうち、最も当てはまるものに◎印をつけて下さい。

- a. 女の方が楽しみが多いから。
- b. 家事や育児が好きだから。
- c. 女の方が自由で好きなことができるから。
- d. 現在に満足しているから。不満がないから。
- e. 女の方が職業に就く苦勞が少ないから。
- f. 女は子供を産み育てることができるから。
- g. 女の方がいろいろな点で責任が軽く楽だから。
- h. 女性的体格・性格に満足しているから。
- i. 女の方が趣味や仕事を楽しめるから。
- j. その他 ( )

### (1) 出生位置別検討

表58に示すように、対象者全体の場合、「d. 現在に満足しているから。不満がないから」という者が32.1%で最も多く、次いで「f. 女は子供を産み育てることができるから」という者が16.8%, などの順となっている。複数回答を集計した表59の場合でも、主要な理由については同じものがあげられている。全対象者の出生位置別比較では、どの群間でも統計的に有意な差は認められない。

出生位置別の差異をより厳密な条件で検討するため、二人っ子について長子と末っ子に分け、また、三人っ子について長子・中間子・末っ子に分けて、表58と同様な方法で集計し比較してみた。その結果、どの群間でも統計的に有意な差は認められない。

### (2) きょうだい数別検討・出生順位別検討・性別構成別検討

きょうだい数別検討・出生順位別検討・性別構成別検討については、表58と同様な方法で集計し比較したが、それぞれの群間で差はあまりみられず、検定の結果、どの場合の群間でも統計的に有意な差は認められない。

以上のように、どのきょうだい関係の検討からも、きょうだい関係と「また女に生まれ変わりたい理由」との間に何らかの関係があるという結果は得られていない。



表58 また女に生まれてほしい理由1（出生位置別，全対象者）

単位：人（％）

理由	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子	備 考
d	295(32.1)	141(33.7)	35(36.5)	98(29.5)	21(28.8)	検定の結果， どの群間でも 有意差なし。
f	154(16.8)	66(15.8)	16(16.7)	58(17.5)	14(19.2)	
a	92(10.0)	41( 9.8)	11(11.5)	32( 9.6)	8(11.0)	
b	74( 8.1)	38( 9.1)	5( 5.2)	26( 7.8)	5( 6.8)	
i	74( 8.1)	32( 7.7)	11(11.5)	26( 7.8)	5( 6.8)	
c	64( 7.0)	31( 7.4)	7( 7.3)	22( 6.6)	4( 5.5)	
e	64( 7.0)	30( 7.2)	1( 1.0)	27( 8.1)	6( 8.2)	
g	52( 5.7)	20( 4.8)	4( 4.2)	24( 7.2)	4( 5.5)	
h	39( 4.2)	16( 3.8)	6( 6.3)	13( 3.9)	4( 5.5)	
j	11( 1.2)	3( 0.7)	0( - )	6( 1.8)	2( 2.7)	
合計	919(100.2)	418(100.0)	96(100.2)	332(99.8)	73(100.0)	

注) 最も当てはまるものの一つの場合。ここでは，頻度順に並べ替えて示した。

表59 また女に生まれてほしい理由2（出生位置別，全対象者）

単位：人（％）

理由	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子
d	459(49.9)	217(51.9)	45(46.9)	165(49.7)	32(43.8)
f	325(35.4)	143(34.2)	34(35.4)	124(37.3)	24(32.9)
a	272(29.6)	117(28.0)	31(32.3)	100(30.1)	24(32.9)
b	267(29.1)	126(30.1)	34(35.4)	91(27.4)	16(21.9)
i	261(28.4)	127(30.4)	33(34.4)	84(25.3)	17(23.3)
e	221(24.0)	97(23.2)	25(26.0)	85(25.6)	14(19.2)
g	200(21.8)	91(21.8)	19(19.8)	79(23.8)	11(15.1)
c	187(20.3)	89(21.3)	25(26.0)	63(19.0)	10(13.7)
h	148(16.1)	73(17.5)	26(27.1)	40(12.0)	9(12.3)
j	16( 1.7)	5( 1.2)	1( 1.0)	8( 2.4)	2( 2.7)
基準数	919	418	96	332	73

注) 当てはまるものすべての場合。ここでは，頻度順に並べ替えて示した。

## 21. 男女の能力差の認識

男女の能力差の認識については，次のように設問し，以下に示すような回答を得た。

【質問19】人間の能力には、体力・知力・精神力などいろいろなものがありますが、女性特有の母性機能などを除いた場合、男と女とでは能力に差があると思いますか。次の中で、あなたの考えに最も近いものを一つ選んで、記号に○印をつけて下さい。

- a. 特に差はない。
- b. 体力の差はあるが、それ以外では差はない。
- c. どちらかといえば、男の方がすぐれている。
- d. どちらかといえば、女の方がすぐれている。
- e. それぞれ特性があって比較できない。
- f. その他 ( )
- g. わからない。

### (1) 出生位置別検討

表60に示すように、対象者全体の場合、「e. それぞれ特性があって比較できない」という者が49.0%で最も多く、次いで「b. 体力の差はあるが、それ以外では差はない」という者が28.8%、「c. どちらかといえば、男の方がすぐれている」という者が15.5%となっている。全対象者の出生位置別比較では、どの群間でも統計的に有意な差は認められない。

出生位置別の差異をより厳密な条件で検討するため、二人っ子について長子と末っ子に分け、また、三人っ子について長子・中間子・末っ子に分けて、表60と同様な方法で集計し比較してみた。その結果、どの群間でも統計的に有意な差は認められない。

### (2) きょうだい数別検討・出生順位別検討・性別構成別検討

きょうだい数別検討・出生順位別検討・性別構成別検討については、表60と同様な方法で集計し比較したが、それぞれの群間で差はあまりみられず、検定の結果、どの場合の群間でも統計的に有意な差は認められない。

表60 男女の能力差の認識（出生位置別，全対象者）

単位：人（％）

認識	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子	備 考
a	74( 3.5)	36( 4.0)	7( 3.0)	21( 2.7)	10( 6.0)	検定の結果、 どの群間でも 有意差なし。
b	601(28.8)	253(28.2)	80(34.3)	217(27.5)	51(30.7)	
c	323(15.5)	140(15.6)	38(16.3)	122(15.4)	23(13.9)	
d	25( 1.2)	10( 1.1)	4( 1.7)	7( 0.9)	4( 2.4)	
e	1,022(49.0)	443(49.4)	100(42.9)	404(51.1)	75(45.2)	
f	10( 0.5)	5( 0.6)	0( - )	5( 0.6)	0( - )	
g	30( 1.4)	9( 1.0)	4( 1.7)	14( 1.8)	3( 1.8)	
合計	2,085(99.9)	896(99.9)	233(99.9)	790(100.0)	166(100.0)	

以上のように、どのきょうだい関係の検討からも、きょうだい関係と「男女の能力差の認識」との間に何らかの関係があるという結果は得られていない。

## 22. 家庭等での差別的扱いの経験

家庭の中、学校の中、及び一般社会での差別的扱いの経験については、次のように設問し、以下に示すような回答を得た。

【質問20】あなたは、今まで家庭や学校などで「女の子だから」とか、「女のくせに」などと言われたり、扱われたりしたことがありましたか。次の中から、当てはまるものをそれぞれ一つ選んで下さい。

- |         |             |              |
|---------|-------------|--------------|
| 家庭の中で…… | a. しばしばあった。 | c. ほとんどなかった。 |
|         | b. 時々あった。   | d. まったくなかった。 |
| 学校の中で…… | a. しばしばあった。 | c. ほとんどなかった。 |
|         | b. 時々あった。   | d. まったくなかった。 |
| 一般社会で…… | a. しばしばあった。 | c. ほとんどなかった。 |
|         | b. 時々あった。   | d. まったくなかった。 |

### (1) 出生位置別検討

表61に示すように、場所（場面）によって、差別的扱いを受けた経験が大きく異なる。「a. しばしばあった」と「b. 時々あった」とを合わせて「差別的扱いがあった」とし、「c. ほとんどなかった」と「d. まったくなかった」とを合わせて「差別的扱いがなかった」として、単純化してみると、対象者全体の場合、「差別的扱いがあった」は、家庭の中では67.6%、学校の中では47.6%、一般社会では34.7%となっている。全対象者の出生位置別比較では、「学校の中」では、どの群間でも統計的に有意差がないが、「家庭の中」及び「一般社会」で長子と一人っ子との間で有意差が認められる。ただし、調査の実施年によって分け、結果の一貫性を確認したところ、1993年の結果では有意差が認められるが、1994年の結果では有意差は認められない。

出生位置別の差異をより厳密な条件で検討するため、二人っ子について長子と末っ子に分け、また、三人っ子について長子・中間子・末っ子に分けて、表61と同様な方法で集計し比較してみた。その結果、どの群間でも統計的に有意な差は認められない。

### (2) きょうだい数別検討

きょうだい数別検討では、一人っ子・二人っ子・三人っ子・四人以上について、表61と同様な方法で集計し比較した（表62）。検定の結果、「学校の中」では、どの群間でも統計的に有意差がないが、「家庭の中」及び「一般社会」で一人っ子と三人っ子との間で有意差が認められる。しかし、きょうだい数の増加に伴う一定の増減傾向が認められるものではなく、結果の一貫性を検討してみると、有意差が認められるのは、1993年の「家庭の中」の一人っ子と三人っ子との間だけである。

表61 差別的扱いの経験（出生位置別，全対象者）

単位：人（％）

場 所	経験	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子
家庭の中	a	510(24.5)	223(24.9)	68(29.2)	185(23.4)	34(20.5)
	b	899(43.1)	384(42.9)	100(42.9)	339(42.9)	76(45.8)
	c	494(23.7)	219(24.4)	47(20.2)	195(24.7)	33(19.9)
	d	182( 8.7)	70( 7.8)	18( 7.7)	71( 9.0)	23(13.9)
	合計	2,085(100.0)	896(100.0)	233(100.0)	790(100.0)	166(100.1)
学校の中	a	207( 9.9)	90(10.0)	24(10.3)	76( 9.6)	17(10.2)
	b	786(37.7)	340(37.9)	91(39.1)	300(38.0)	55(33.1)
	c	900(43.2)	391(43.6)	104(44.6)	334(42.3)	71(42.8)
	d	192( 9.2)	75( 8.4)	14( 6.0)	80(10.1)	23(13.9)
	合計	2,085(100.0)	896(99.9)	233(100.0)	790(100.0)	166(100.0)
一般社会	a	131( 6.3)	60( 6.7)	17( 7.3)	47( 5.9)	7( 4.2)
	b	592(28.4)	272(30.4)	61(26.2)	220(27.8)	39(23.5)
	c	1,033(49.5)	438(48.9)	122(52.4)	391(49.5)	82(49.4)
	d	329(15.8)	126(14.1)	33(14.2)	132(16.7)	38(22.9)
	合計	2,085(100.0)	896(100.1)	233(100.1)	790(99.9)	166(100.0)

注) 検定の結果，「家庭の中」及び「一般社会」で長子と一人っ子との間で各5％水準で有意差あり。「学校の中」では，どの群間でも有意差なし。

表62 差別的扱いの経験（きょうだい数別，全対象者）

単位：人（％）

場 所	経験	全 体	一人っ子	二人っ子	三人っ子	四人以上
家庭の中	a	510(24.5)	34(20.5)	287(23.2)	171(28.8)	18(20.9)
	b	899(43.1)	76(45.8)	541(43.7)	244(41.1)	38(44.2)
	c	494(23.7)	33(19.9)	304(24.5)	135(22.7)	22(25.6)
	d	182( 8.7)	23(13.9)	107( 8.6)	44( 7.4)	8( 9.3)
	合計	2,085(100.0)	166(100.1)	1,239(100.0)	594(100.0)	86(100.0)
一般社会	a	131( 6.3)	7( 4.2)	79( 6.4)	39( 6.6)	6( 7.0)
	b	592(28.4)	39(23.5)	351(28.3)	183(30.8)	19(22.1)
	c	1,033(49.5)	82(49.4)	620(50.0)	283(47.6)	48(55.8)
	d	329(15.8)	38(22.9)	189(15.3)	89(15.0)	13(15.1)
	合計	2,085(100.0)	166(100.0)	1,239(100.0)	594(100.0)	86(100.0)

注) 検定の結果，「家庭の中」と「一般社会」で一人っ子と三人っ子との間で各5％水準で有意差あり。「学校の中」では，どの群間でも有意差がないため省略。

## (3) 出生順位別検討

出生順位別検討では、第1子・第2子・第3子以降について、表61と同様な方法で集計し比較した。その結果、データとしても出生順位に伴う一定の傾向は認められず、検定の結果、どの群間でも統計的に有意な差は認められない。

## (4) 性別構成別検討

性別構成の違いによる検討では、第1報の「Ⅱ 方法 3」の「(4)性別構成による分類」で示した分類と対象数について、表61と同様な方法で集計し比較した。その結果、「学校の中」や「一般社会」では差が認められないが、「家庭の中」では、表63に示すように、きょうだいの性別によって明らかな差が認められ、検定の結果でも全群の間で統計的に有意差が認められる。結果の一貫性を確認したところ、1993年実施分・1994年実施分ともに同様な結果であり、検定の結果でも全群の間で統計的に有意差が認められる。したがって、「家庭の中」では、男のきょうだいがいる者のほうが、より多く「男女の差別的扱いがあった」と受け止めている。

このことは、二人っ子について、さらに兄・弟・姉・妹がいる者に分けて検討した結果でも確認できる。表64に示すように、「家庭の中」では、男のきょうだいがいる者と女のきょうだ

表63 差別的扱いの経験（性別構成別，二人っ子・三人っ子）

単位：人（％）

場 所	経験	二 人 っ 子		三 人 っ 子		
		男 1 人	女 1 人	男 2 人	女1男1人	女 2 人
家庭の中	a	184(28.3)	103(17.5)	59(47.6)	90(29.3)	22(13.5)
	b	290(44.6)	251(42.6)	43(34.7)	125(40.7)	76(46.6)
	c	137(21.1)	167(28.4)	19(15.3)	73(23.8)	43(26.4)
	d	39( 6.0)	68(11.5)	3( 2.4)	19( 6.2)	22(13.5)
	合計	650(100.0)	589(100.0)	124(100.0)	307(100.0)	163(100.0)

注) 検定の結果、「家庭の中」で、男1人と女1人の間、及び男2人と女1男1人と女2人との間で各1％水準で有意差あり。

表64 差別的扱いの経験（性別構成別，二人っ子）

単位：人（％）

場 所	経験	兄がいる者	弟がいる者	姉がいる者	妹がいる者
家庭の中	a	88(28.0)	96(28.6)	38(14.7)	65(19.6)
	b	144(45.9)	146(43.5)	110(42.6)	141(42.6)
	c	61(19.4)	76(22.6)	78(30.2)	89(26.9)
	d	21( 6.7)	18( 5.4)	32(12.4)	36(10.9)
	合計	314(100.0)	336(100.1)	258(99.9)	331(100.0)

注) 検定の結果、「家庭の中」で、「兄がいる者」と「姉がいる者」・「妹がいる者」との間、及び「弟がいる者」と「姉がいる者」・「妹がいる者」との間で、各1％水準で有意差あり。

いがいる者との間で有意差が認められ、兄がいる者と弟がいる者との間及び姉がいる者と妹がいる者との間では有意差が認められない。この場合の結果の一貫性も矛盾なく確認できる。

二人っ子・三人っ子の場合、きょうだいが少ないということで、「家庭の中」で対比・対照されやすい状況に置かれるが、さらに対比・対照しやすい男・女の組み合わせであるとなれば、どうしても差別的（区別的・比較的）扱いを受けることが多くなるのであろう。

以上のように、きょうだいの性別構成と「家庭の中での差別的扱いの経験」との間に関係があり、女のきょうだいがいる者よりも、男のきょうだいがいる者のほうが「家庭の中で男女の差別的扱いを多く受けた」と受け止めている、と言える。

### 23. 結婚後の親との同居についての考え

結婚後の親（夫の親及び自分の親）との同居についての考えは、次のように設問し、以下に示すような回答を得た。

【質問21】あなたは、結婚後、夫の親又は自分の親との同居をどのように考えますか。  
下のa～eの中から当てはまるものをそれぞれ一つずつ選んで、（ ）内にその記号を書き入れて下さい。（1994年調査）

- |                        |                 |
|------------------------|-----------------|
| 夫の親との同居（            ）  | a. ぜひ同居したい。     |
|                        | b. できれば同居したい。   |
|                        | c. なるべく同居したくない。 |
| 自分の親との同居（            ） | d. 絶対に同居したくない。  |
|                        | e. どちらでもよい。     |

#### (1) 出生位置別検討

表65に示すように、夫の親と自分の親とでは、同居についての考えが大きく異なる。「a. ぜひ同居したい」と「b. できれば同居したい」とを合わせて「同居したい」とし、「c. なるべく同居したくない」と「d. 絶対に同居したくない」とを合わせて「同居したくない」として、単純化してみると、対象者全体の場合、「同居したい」は少なく、夫の親では6.1%、自分の親では23.7%となっており、一方、「同居したくない」は、夫の親では71.1%、自分の親では47.8%となっている。自分の親との同居に好意的である。

全対象者の出生位置別比較では、中間子で「e. どちらでもよい」が多い点が特徴的で、「夫の親」及び「自分の親」で長子と中間子との間で有意差が認められる。ただし、この項目は1994年だけの実施であるので、結果の一貫性は検討されていない。

出生位置別の差異をより厳密な条件で検討するため、二人っ子について長子と末っ子に分け、また、三人っ子について長子・中間子・末っ子に分けて、表65と同様な方法で集計し比較してみた（表66）。その結果、「自分の親との同居」で、三人っ子の長子と中間子との間で有意差が認められる。

表65 結婚後の親との同居（出生位置別，全対象者）

単位：人（％）

同居者	希望	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子
夫 の 親	a	15( 1.3)	7( 1.4)	1( 0.8)	6( 1.3)	1( 1.3)
	b	55( 4.8)	25( 5.0)	5( 3.9)	19( 4.2)	6( 7.8)
	c	580(50.1)	258(51.7)	56(44.1)	235(51.8)	31(40.3)
	d	243(21.0)	108(21.6)	23(18.1)	94(20.7)	18(23.4)
	e	264(22.8)	101(20.2)	42(33.1)	100(22.0)	21(27.3)
	合計	1,157(100.0)	499(99.9)	127(100.0)	454(100.0)	77(100.1)
自分の親	a	42( 3.6)	21( 4.2)	7( 5.5)	9( 2.0)	5( 6.5)
	b	233(20.1)	110(22.0)	18(14.2)	87(19.2)	18(23.4)
	c	432(37.3)	186(37.3)	51(40.2)	175(38.5)	20(26.0)
	d	121(10.5)	57(11.4)	7( 5.5)	47(10.4)	10(13.0)
	e	329(28.4)	125(25.1)	44(34.6)	136(30.0)	24(31.2)
	合計	1,157(99.9)	499(100.0)	127(100.0)	454(100.1)	77(100.1)

注) 検定の結果、「夫の親」及び「自分の親」で長子と中間子との間で各5％水準で有意差あり。

表66 結婚後の自分の親との同居（出生位置別，二人っ子・三人っ子） 単位：人（％）

希望	二 人 っ 子		三 人 っ 子			備 考
	長 子	末 っ 子	長 子	中 間 子	末 っ 子	
a	14( 3.8)	6( 1.9)	7( 6.0)	4( 3.9)	3( 2.5)	検定の結果， 三人っ子の長 子と中間子と の間に1％水 準で有意差あ り。
b	81(21.8)	61(19.1)	26(22.2)	12(11.7)	23(19.3)	
c	132(35.5)	116(36.3)	50(42.7)	44(42.7)	50(42.0)	
d	41(11.0)	34(10.6)	15(12.8)	7( 6.8)	13(10.9)	
e	104(28.0)	103(32.2)	19(16.2)	36(35.0)	30(25.2)	
合計	372(100.1)	320(100.1)	117(99.9)	103(100.1)	119(99.9)	

## (2) きょうだい数別検討

きょうだい数別検討では，一人っ子・二人っ子・三人っ子・四人以上について，表65と同様な方法で集計し比較した（表67）。その結果，「自分の親」では，どの群間でも有意差がないが，「夫の親」で二人子と三人っ子・四人以上との間で有意差が認められる。ただし，この項目は1994年だけの実施であるので，結果の一貫性は検討されていない。

## (3) 出生順位別検討

出生順位別検討では，第1子・第2子・第3子以降について，表65と同様な方法で集計し比較した（表68）。検定の結果，一部の群間で統計的に有意な差が認められるが，データとしては出生順位に伴う一定の傾向は認められない。この項目は1994年だけの実施であるので，結果の一貫性は検討されていない。

表67 結婚後の親との同居（きょうだい数別，全対象者）

単位：人（％）

同居者	希望	全 体	一人っ子	二人っ子	三人っ子	四人以上
夫の親	a	15( 1.3)	1( 1.3)	10( 1.4)	4( 1.2)	0( - )
	b	55( 4.8)	6( 7.8)	29( 4.2)	14( 4.1)	6(12.2)
	c	580(50.1)	31(40.3)	346(50.0)	177(52.2)	26(53.1)
	d	243(21.0)	18(23.4)	168(24.3)	53(15.6)	4( 8.2)
	e	264(22.8)	21(27.3)	139(20.1)	91(26.8)	13(26.5)
	合計	1,157(100.0)	77(100.1)	692(100.0)	339(99.9)	49(100.0)

注) 検定の結果，「夫の親」で二人っ子と三人っ子（1％水準）・四人以上（5％水準）との間で有意差あり。「自分の親」では，どの群間でも有意差がないため省略。

表68 結婚後の親との同居（出生順位別，全対象者）

単位：人（％）

同居者	希望	全 体	第 1 子	第 2 子	第3子以降	備 考
夫の親	a	15( 1.3)	8( 1.4)	4( 0.9)	3( 2.0)	検定の結果， 第2子と第3 子との間で 5％水準で有 意差あり。
	b	55( 4.8)	31( 5.4)	14( 3.2)	10( 6.8)	
	c	580(50.1)	289(50.2)	212(49.0)	79(53.4)	
	d	243(21.0)	126(21.9)	100(23.1)	17(11.5)	
	e	264(22.8)	122(21.2)	103(23.8)	39(26.4)	
	合計	1,157(100.0)	576(100.1)	433(100.0)	148(100.1)	
自分の親	a	42( 3.6)	26( 4.5)	10( 2.3)	6( 4.1)	検定の結果， 第1子と第2 子との間で 5％水準で有 意差あり。
	b	233(20.1)	128(22.2)	75(17.3)	30(20.3)	
	c	432(37.3)	206(35.8)	164(37.9)	62(41.9)	
	d	121(10.5)	67(11.6)	41( 9.5)	13( 8.8)	
	e	329(28.4)	149(25.9)	143(33.0)	37(25.0)	
	合計	1,157(99.9)	576(100.0)	433(100.0)	148(100.1)	

#### (4) 性別構成別検討

性別構成の違いによる検討では，第1報の「Ⅱ 方法 3」の「(4)性別構成による分類」で示した分類と対象数について，表65と同様な方法で集計し比較した。その結果，一定の傾向も統計的な有意差も認められない。

以上のように，いくつかのきょうだい関係の検討で統計的に有意差が認められ，きょうだい関係と「結婚後の親（夫の親及び自分の親）との同居について考え」との間に何らかの関係があるのではないか，という結果が得られている。しかし，大きな差異は認められないので，結果の一貫性の検討をしてからでないと，はっきりと関係があるとは言えない。

#### 24. 親と同居する場合の希望

結婚後，親と同居する場合の希望については，次ページの囲みのように設問し，以下に示す



【質問22】結婚後、親と同居するとすれば、あなたならどちらの親と同居したいですか。次の中から、当てはまるものを一つ選んで下さい。(1994年調査)

- a. 夫の親。                      c. どちらか一方の親。  
b. 自分の親。                  d. 両方の親。

ような回答を得た。

(1) 出生位置別検討

表69に示すように、対象者全体的場合、「b. 自分の親」と同居したいという者が50.3%で最も多く、「c. どちらか一方の親」と同居したいという者も31.1%いる。全対象者の出生位置別比較では、長子と末っ子及び一人っ子と中間子・末っ子との間で統計的に有意な差が認められる。ただし、この項目は1994年だけの実施であるので、結果の一貫性は検討されていない。一人っ子では、「d. 両方の親」との同居を希望する者が多い点に特徴がある。

出生位置別の差異をより厳密な条件で検討するため、二人っ子について長子と末っ子に分け、また、三人っ子について長子・中間子・末っ子に分けて、表69と同様な方法で集計し比較してみた(表70)。その結果、二人っ子の長子と末っ子との間で有意差が認められるが、三人っ子ではどの群間でも有意差は認められない。

表69 親と同居する場合の希望(出生位置別、全対象者)

単位: 人 (%)

希望	全 体	長 子	中 間 子	末 っ 子	一人っ子	備 考
a	139(12.0)	50(10.0)	18(14.2)	65(14.3)	6( 7.8)	検定の結果、 注に示す群間 で有意差あり。
b	582(50.3)	248(49.7)	61(48.0)	234(51.5)	39(50.6)	
c	360(31.1)	161(32.3)	43(33.9)	137(30.2)	19(24.7)	
d	76( 6.6)	40( 8.0)	5( 3.9)	18( 4.0)	13(16.9)	
合計	1,157(100.0)	499(100.0)	127(100.0)	454(100.0)	77(100.0)	

注) 長子と末っ子との間で5%水準で有意。一人っ子と中間子・末っ子との間で各1%水準で有意。

表70 親と同居する場合の希望(出生位置別、二人っ子・三人っ子)

単位: 人 (%)

希望	二 人 っ 子		三 人 っ 子			備 考
	長 子	末 っ 子	長 子	中 間 子	末 っ 子	
a	35( 9.4)	36(11.3)	14(12.0)	15(14.6)	26(21.8)	検定の結果、 二人っ子の長 子と末っ子との 間で5%水準 で有意差あり。
b	195(52.4)	177(55.3)	50(42.7)	54(52.4)	52(43.7)	
c	110(29.6)	96(30.0)	46(39.3)	33(32.0)	36(30.3)	
d	32( 8.6)	11( 3.4)	7( 6.0)	1( 1.0)	5( 4.2)	
合計	372(100.0)	320(100.0)	117(100.0)	103(100.0)	119(100.0)	

## (2) きょうだい数別検討

きょうだい数別検討では、一人っ子・二人っ子・三人っ子・四人以上について、表69と同様な方法で集計し比較した（表71）。その結果、全群の間で有意差が認められる。ただし、きょうだい数の増加に伴う一定の増減傾向は明確でない。この項目は1994年だけの実施であるので、結果の一貫性は検討されていない。

## (3) 出生順位別検討

出生順位別検討では、第1子・第2子・第3子以降について、表69と同様な方法で集計し比較した（表72）。検定の結果、どの群間でも統計的な有意差が認められる。出生順位が後の者ほど「夫の親」との同居を希望する率は高くなる傾向にある。ただし、この項目は1994年だけの実施であるので、結果の一貫性は検討されていない。

## (4) 性別構成別検討

性別構成の違いによる検討では、第1報の「Ⅱ 方法 3」の「(4)性別構成による分類」で示した分類と対象数について、表69と同様な方法で集計し比較した。その結果、一定の傾向も統計的な有意差も認められない。

以上のように、いくつかのきょうだい関係の検討で統計的に有意差が認められ、きょうだい関係と「結婚後、親と同居する場合の希望」との間に何らかの関係があるのではないかと、いう結果が得られている。しかし、大きな差異は認められないので、結果の一貫性の検討をしてからでないと、はっきりと関係があるとは言えない。

表71 親と同居する場合の希望（きょうだい数別，全対象者）

単位：人（％）

希望	全 体	一人っ子	二人っ子	三人っ子	四人以上	備 考
a	139(12.0)	6( 7.8)	71(10.3)	55(16.2)	7(14.3)	検定の結果， 全群の間で各 1％水準で有意差あり。
b	582(50.3)	39(50.6)	372(53.8)	156(46.0)	15(30.6)	
c	360(31.1)	19(24.7)	206(29.8)	115(33.9)	20(40.8)	
d	76( 6.6)	13(16.9)	43( 6.2)	13( 3.8)	7(14.3)	
合計	1,157(100.0)	77(100.0)	692(100.1)	339(99.9)	49(100.0)	

表72 親と同居する場合の希望（出生順位別，全対象者）

単位：人（％）

希望	全 体	第 1 子	第 2 子	第3子以降	備 考
a	139(12.0)	56( 9.7)	54(12.5)	29(19.6)	検定の結果，第1子と第2子・第3子以降との間，第2子と第3子以降との間で，各1％水準で有意差あり。
b	582(50.3)	287(49.8)	234(54.0)	61(41.2)	
c	360(31.1)	180(31.3)	133(30.7)	47(31.8)	
d	76( 6.6)	53( 9.2)	12( 2.8)	11( 7.4)	
合計	1,157(100.0)	576(100.0)	433(100.0)	148(100.0)	

#### Ⅳ ま と め

以上、青年後期にあたる女子短大生を対象に調査を実施して、きょうだい関係と意識（意見・態度。特に、性差観）の関連について、多面的に実証的な検討を試みた。

今回は、第1報・第2報に引き続き、意識調査の一部の項目（①女に生まれたことの感想、②生まれ変わるときの希望の性、③男に生まれ変わりたい理由、④また女に生まれたい理由、⑤男女の能力差の認識、⑥家庭等での差別的扱いの経験、⑦結婚後の親との同居についての考え、⑧親と同居する場合の希望）についての結果を報告したが、前回報告分と同様に、きょうだい関係の違いによる意識（性差観）の差異は、あまり多く見られなかった。

今回報告分の結果で統計的に有意差が認められた項目はいくつかあったが、結果の一貫性（安定性）などの面で問題を含んでいるため、結論として言えるものは、次のことだけである。すなわち、きょうだいの性別構成と「家庭の中での差別的扱いの経験」との間に関係があり、女のきょうだいがいる者よりも、男のきょうだいがいる者のほうが「家庭の中で男女の差別的扱いを多く受けた」と受け止めている。

3回にわたって報告した意識調査の結果は、「きょうだい関係による差異はあまり認められない」という点では、これまでに筆者が行ってきた「きょうだい関係と性格」の諸研究<sup>3)~6)</sup>の結果とおおよそ一致するものである。ただし、このような結果が得られたからといって、直ちに青年後期におけるきょうだい関係と意識との関連を否定するものではない。今回の調査によって、また一つ、否定的な結果が得られたことだけは確かである。

慎重な言い方をすれば、本研究の対象者についてきょうだい関係による意識（意見・態度）の差異があまり確認されなくても、他の対象者では差異が認められるという場合も考えられるので、同一項目による調査を別の対象者に実施する交差妥当性の研究又は結果の一貫性確認の研究が必要であり、また、男子を含めて、多数の対象者について多面的なデータを集め、性別・発達段階別などを加味した詳細な分析・検討も必要である。

第1・2報でも述べたように、既存の研究には、青年後期・成人期の者を対象にしたものが少ないことも、一般化に慎重を要する点である。青年後期・成人期の者を対象に諸調査を実施するなど、多方面からのデータの蓄積を行ってからでないと、一般化や断定的な判断はできないであろう。仮に、幼少期の性格形成に大きかったきょうだい関係の影響が、年長になるにつれて次第に低減していくとすれば、どの発達段階まで影響を及ぼすのか、縦断的研究も必要である。

#### 文 献

- 1) 白佐俊憲：きょうだい関係と意識－1. 子供観調査による検討(1)－, 北海道女子大学短期大学部研究紀要, 33号, 15～36, 1997.
- 2) 白佐俊憲：きょうだい関係と意識－2. 子供観調査による検討(2)－, 北海道女子大学短期

大学部研究紀要, 34号, 17~34, 1998.

- 3) 白佐俊憲: きょうだい関係と性格-1. Y G性格検査による検討-, 北海道女子短期大学研究紀要, 29号, 1~16, 1993.
- 4) 白佐俊憲: きょうだい関係と性格-2. 自己評定による検討-, 北海道女子短期大学研究紀要, 30号, 1~15, 1994.
- 5) 白佐俊憲: きょうだい関係と性格-3. 文献による検討-, 北海道女子短期大学研究紀要, 31号, 1~16, 1995.
- 6) 白佐俊憲: きょうだい関係と性格-4. S P I 検査による検討-, 北海道女子短期大学研究紀要, 32号, 1~15, 1996.

(1998・1・20)

A Study on Sibling Relations and Consciousness  
- Analysis of Views on Sex Difference -

Toshinori SHIRASA

**ABSTRACT**

This is the third report of a multiple study on sibling relations and consciousness (opinions, attitudes). 2085 students of a women's junior college (928 in 1993 and 1157 in 1994) answered a questionnaire on the theme. The results of their views on childhood have already reported and this report shows the results on the following 8 items on sex differences: (1) what they think about being a female; (2) which sex they would like to be if they were to be born again; (3) why they would rather like to be born as a male; (4) why they would like to be born as a female again; (5) whether they think there is any sex difference in abilities; (6) whether they have experienced sex discrimination at home etc.; (7) whether they want to live with their parents after marriage; (8) their ideal life style if they choose to live with their parents.

Sibling relations were analysed according to four categories; birth situation, the number of siblings, birth order and sex of siblings.

There seems to be very few differences in views on sex difference with respect to sibling relations, although there are significant difference on some items. Because, these results have problems of consistency. The previous reports as well as this one show little relationship between sibling relations and consciousness, which correspond with a series of studies on sibling relations and personal characteristics.

This study does not deny all the relationships between sibling relations and consciousness (views on sex difference) of late adolescence. Few studies on sibling relations have been reported with adolescents or adults. Additional data and detailed analysis will be needed before making generalizations and judgement.

**Key words** : sibling relations, consciousness, sex difference.